

絵馬に残された赤十字の心

伊予市上吾川、郡中小学校のすぐ近くに小高い森と
なっている伊予岡古墳がある。その古墳の中に伊予丘
八幡神社がある。

その神社に日露戦争のようすを描いた絵馬が掲げられている。絵馬とは、人々がお願い
やお礼のためにお宮やお寺に納める絵の額のことである。



伊予岡古墳



伊予岡八幡神社拝殿

絵 馬 (150 cm×200 cm)

この絵は一見、砲弾がさく裂する激しい戦いのようすが描かれているようであるが、よく見ると画面の下半分は、三人の傷ついた兵士が衛生兵の手当を受けている。傷ついた兵士のうち、二人は日本兵と思われるが、そのうちの一人は鼻ひげをはやした将校（兵士たちの指揮をする人）が赤十字の腕章をつけた衛生兵に抱きかかえられるような姿勢で右足首の手当を受けている。その右にいるもう一人は、すでに手当をうけ休んでいる。

面左下の方のあと一人は、日本兵とは明らかに異なると思われる兵士が描かれている。注意深く見ると、高い鼻、くぼんだ眼、口元の栗色のひげ、長靴などからロシア人兵士と考えられる。そのロシア兵士は力なくうつろな目で日本兵に抱きかかえられている。



その横には、赤十字のマークの入った救急袋のようなものや担架があり、近くの樹の枝には赤十字の旗が掲げられている。すなわち、この場所は赤十字の旗の下での救護所のようなすを描いたものである。

このように赤十字とかかわりの深い絵馬をだれが、なぜ、納めたのであろうか。

明治38年日露戦争に参戦し、無事故郷へ帰ることができた下吾川出身の兵士で沖多三郎さんや田中万三郎さんら20数名は、時々顔を合わせて、戦場での厳しかった体験を語り合うようになった。そして、寄り合いの場所になっていた伊予岡八幡神社の拝殿に自分たちの体験の一部を表すような絵馬を奉納しようということになった。そして、みんなが苦しい財布の中からお金を出し合い、京都の画工守川其峰さんに注文し、明治39年5月に届けられた。

しかし、どうして絵馬の中心となる画面に赤十字の救護所のようなすを描いたのかということについては史料や伝言は一切残されていない。

この絵馬に重要な意味があることを発見した郷土史研究家の島津豊幸さんは、次のように述べている。

この絵馬を作った下吾川の兵士たちは激しい戦闘の中でも、敵味方の区別なしに傷ついた兵士たちの手当をした体験を人々に誇らかに伝えたかったのではないだろうか。戦争という異常な雰囲気の中では、残虐（人間としては許されないようなむごたらしい行ない）な行為がしばしば行われるが、下吾川の兵士たちは、そのようなことをしなっただけで

はなく、それどころか人道・博愛の心で、傷ついたロシア兵士に対しても親切な行為を行ったのであろう」

このように島津さんが推察した兵士たちの気持ちは、これはまさに、日露戦争が始まる18年前に日本が加入した国際赤十字の人道・博愛の精神と同じ心といえるものである。なお、この絵馬は平成2年に伊予市の指定文化財となった。その理由として「この絵馬は日露戦争のさなかに負傷兵を敵味方の区別なく介抱している図である。敵国の軍人に対しても、祖国のために忠誠を尽くした武人として扱い敬意を失わなかった事実が奉納した兵士によって語られている。・・・」と記されている。

ちょうど、その年、ソ連（現在のロシア）総領事のワレンチン・アレクセイエフ氏がこの絵馬を見て、その博愛精神に感激、地方でも日ソ友好を進めたい意向をもった。そして、平成3年12月15日、伊予市長等多くの人が出席して、日ソ親善植樹記念式典並びにソ連総領事歓迎会が盛大に催された。その時植えたカラマツ2本は、伊予岡八幡神社の境内で現在順調に成長している。

また、平成10年には、長い年月とともに色あせ、画面がはげ落ちるなど、傷みが激しくなったので、地元の人たちを中心にして募金委員会が結成され、本格的な修理保存が行われた。

お世話になった方

伊予市教育委員会

伊予市立郡中小学校長 春 田 勝 利

参考にさせていただいた本

「日赤愛媛県支部百年史」